

極覧

社研だより
第 93 号

令和 4 年 11 月

発行 京都市小学校

教育研究会社会科部会

責任者 京都市小学校

社会科教育研究会

林 正 和

京都市小学校社会科教育研究会
会 長 林 正 和

今年度も京都社研の会長をさせていただくことになりました。社会科への熱意のある会員のみならずと力を合わせながら、京都市の子どもたちの社会科の学びを進めていけることを嬉しく思っています。「京都の子どもたちに社会科を通して確固たる力を付ける」という熱い思いを基盤に設立された本研究会の意思を受け継ぎ、今の社会に生きる子どもたちが少しでも豊かに生きられる力を、社会科を通じて付けていきたいと願っています。

さて、新型コロナウイルスの終息がなかなか見通せない状態が続いています。昨年度も全国大会はオンライン、京都社研の研究集会も中止と、現行の指導要領のもとでの社会科の授業のあり方を十分に検証できない日々が続いています。各学年部の取組でも、実際に授業をみんなで見て、その授業に対する考えを出し合う形での研究会は、なかなか思うように運べないままです。そのような中でも、研修のモチ方を工夫したり、各委員会が積極的に活動を続けたりしながら、着実な成果をあげ続けてくれていることに京都社研の力強さと柔軟性を感じ、頼もしく思うとともに感謝の気持ちでいっぱいになります。

令和 8 年度には京都で 3 回目となる全国大会が予定されています。全国に向けて京都の取組を発信するまたとない機会となります。研究を積み重ねその力を結集して、京都社研がめざす社会科の授業の姿を具現化し、力強く発信していきたいものです。もちろん時間がたつだけで成果が得られるわけではありません。今、目の前にいる子どもたちにどのような資質・能力の育成が求められているかを考え、社会科の目標に似合った授業づくりを繰り返し、そこから見えてきた京都社研がめざす授業を作り出し続けることが必要となってきます。

この春に教科調査官の小倉勝登先生のお話を聞く機会がありました。目指す社会科の学習の姿はシンプルなものだと感じました。社会科の目標「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動（問題解決的な学習）を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のように育成することを目指す。（以下省略）」これが基本であり、常に指導要領に戻り授業研究をしてほしい。そして、①問いをもち、学習計画や見通しを明らかにした学習過程の構築②学習したことを基に社会との関わりを選択・判断する場面の設定③ICTを有効に活用しての学びの深化④指導と評価の一体化を図り、継続的な指導の改善。これらのことに重点をおいて授業づくりをしてほしいとのメッセージがありました。

GIGAスクール構想により、これからの授業の姿は大きく変化することが予想されます。しかし、子どもたちにつけるべき資質・能力を確かめながら、様々な工夫やアイデアを用い、社会科好きの子どもをたくさん育てたいという思いは変わらず目指していけると考えています。そのためにも、まず教員自身が、社会科の授業を行うことが楽しい、授業づくりを考えるのが好きだと思えるように、それを支える研究会活動であり続けたいものです。京都市教育委員会各課の皆様方や極覧会諸先輩の皆様方には、引き続き、ご支援、ご協力いただければ幸いです。よろしく願いいたします。

今こそ、転換期では？

京都市総合教育センター 首席指導主事 鈴木 宏 紀

日頃より本市教育活動推進にご支援・ご協力
いただいておりますこと深く感謝申し上げます。
昨年度は、京都市スタンダードの加筆修正・副
読本『わたしたちの京都』の部分改訂・『リン
ク集』や『映像資料』の作成等、本市社会科教
育の充実・発展に向けて多大なるご支援・ご協
力をいただきましたこと、改めてお礼申し上げ
ます。微力ではありますが、今後も社会科教育
研究会の皆様と共に京都市の社会科教育の推進
と発展のために尽力したいと思っております。
よろしく願いいたします。

さて、昨年度は全国小学校社会科研究協議会
が大阪・佐賀で開催されました。オンラインで
はありましたが、私も参加させていただきました。
その際、京都の社会科を長年にわたりご指
導いただいております、北俊夫先生（総合初等
教育研究所参与）、安野功先生（國學院大學教
授）、澤井陽介先生（大妻女子大学教授）とい
う歴代の教科調査官であられる先生方の記念講
演・指導講評を聞くことができ、たいへん贅沢
な時間を過ごさせていただきました。

ここでは、3人の先生方のお話をほんの一部
ではありますが、簡単にご紹介させていただきます。

【澤井先生《佐賀大会より一部抜粋・要約》】

- 社会への関わり方を選択・判断する学習場面
においては、立場を明確にする・多様な関わり
方を想定することが大切。多様な関わり方
として、(子どもなので)知る・関心を高める・
知らせる・提案する・参加する、などがある。
また、その際の議論の視点として、実効性・
実現可能性・持続可能性・公正さ、などがある。
- 学習問題づくりは大切であるが、これからは
問題を解決するための見通し（これを調べれば
わかるはず・多分これと関係があるはず・私
はこのことを調べる、など）をもつ学習が
重要なのでは？この見通しが、子どもが自分
の意志をもった学習を進めていくことにつ
ながる。

【安野先生《大阪大会より一部抜粋・要約》】

- `今の社会を読み解き、社会との付き合い方
を学ぶ、社会科から、`過去を知り、今を見
つめ、未来を考える、社会科へと、社会科の
授業観の転換が必要。
- 主体的・対話的で深い学びの実現のカギを握
っているのは、問題解決的な学習の充実。そ
のために……
 - ・授業づくりのねらいや意図を明らかにして
おく
 - ・子どもの姿をイメージしながら、問題解決
のストーリーを思い描く
 - ・教師のねらいや意図と子どもの思いや願い
をすり合わせた単元の構想図を作成する

【北先生《大阪大会より一部抜粋・要約》】

- これからの社会科研究に望むこと
 - ・『目標やねらいを設定することの意味を確認』つまり、目標やねらいを実現するために最大の指導を工夫する。
 - ・『先の社会を見据えた社会科研究を』次期の改訂への内容や教材を現場から提言してほしい。
 - ・『若い教師をいかに育てるか』型にはまったマニュアル化した授業になっていないか。社会科のすそ野を広げるためにも、誰もが実践できる分かりやすい社会科を。

3人の先生方のお話には、3つの共通点がある
のではないのでしょうか。1つは、これからの
社会を考えること(社会科の学習内容)。1つは、
これからの社会科学習について(社会科の学習
展開)。あと1つは、社会科の学習内容や学習展
開について転換を求めていること。

ICT端末やデジタル教科書、少人数学級、教
科担任制、次期指導要領の改訂、コロナウイル
ス感染症、2030年問題など、教育界だけでなく、
社会全体が大きな変化に向かっています。社会
の変化に合わせて社会科も今こそ大きな転換期
を迎えているのではないのでしょうか。私自身も
研究会の皆様と共に、どのような転換を図るこ
とが、これからの子どもたちに必要なかを考
えていきたいと思っております。

『社会を見る目』を育てる社会科学習

～単元を俯瞰し、既習を活用する授業のあり方～

研究部長 森 元 光

□はじめに

これからの世の中は、先行きが不透明な社会、予測が困難な時代など、少し重々しい言葉で表現されることが多い気がします。

そんな世の中にあっても、子どもたちは将来、個人や社会の成長につながる新たな価値を生み出し、たくましく生きていくことが期待されています。

例えば、自分たちの日常生活と学校での学びをつなげてみることができたり、自分たちの生活の中から問題を見出し、問題解決をしようとしたり。また、社会に見られる課題に対し、「自分ができることは?」「どちらの方法がよいのだろう。」と、社会と肯定的につながろうとする。

このように社会を見ることができ、たくましく社会とかかわっていくことが期待されています。だからこそ、社会科授業を通して、刻々と変化する社会を見ることができ、目を育てながら、明るい未来を描かせていきたいと思えます。

そのためには、学習して学んだことをくり返し活用していく必要があります。そうすることで、学びが価値づき、子どもたちはより意欲的に学びを蓄積していくのではないのでしょうか。そして、蓄積した学びを積極的に活用しながら社会を見る目を育てていきたいと考えています。

そこで令和4年度の研究主題を「社会を見る目を育てる社会科学習 ～単元を俯瞰し、既習を活用する授業のあり方～」と設定しました。

1つの単元における既習活用に留まらず、より幅の広い学習内容を活用する学習場面を設定していく。そうしていきながら、子どもたちが社会的事象に向き合い、既習を活用しながら、社会を見る目を育てていく授業へとつなげていきたいと考えています。

□研究の3つの視点

視点1 社会を見る目を育むための教材をつくる

- ・〈複数の単元を俯瞰する〉
各単元をぶつ切りと捉えるのではなく、複数の単元からつながりを見出し、学んだことを積極的に活用していく。
- ・〈教材化分析表を作成する〉
「調べて得られる事実」と「事実から考えたこと」を整理しながら、汎用性の高い知識である「社会を見つめるための知識」までつぶさに教材化を分析する。

視点2 社会を見る目を育むための問いをつくる

- ・〈事実から特色や相互の関連、意味を考える問い〉
調べて分かる事実に留まらず、社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えさせながら、汎用性の高い知識の獲得へとつなげていく。
- ・〈単元をつなげる問い〉
複数の単元を問いでつなげ、既習活用をより促す学習場面を設定する。

視点3 社会を見る目の育ちを見取るために振り返る

- ・〈ふり返りの視点〉
ふり返りの視点を「学びの過程や変容」「内容（社会的事象）から考えたこと」を2つに分け、適宜ふり返りの指導にあたる。
- ・〈ICTを活用した学びの蓄積〉
GIGA端末をどのように活用したり、どのような働きかけをしたりすれば、効果的な活用へとつながるか模索していく。

3年部会

◇3年部会テーマ◇

地域の人々の営みから学びを深め、
自分と地域とのつながりを
考える子ども

3年部会では、地域の様子や人々の姿を通して、それらが相互に関連しあっていることや自分とのかかわりに気づくことで、子どもたちの地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を育てられるようにしたい。

今年度の研究主題である「社会を見る目を育む社会科学習」を展開するために、教材化分析表によって整理した複数の単元を俯瞰し、それらをつなぐ問いを形成する。また、育ちを見取るためのふり返りを研究提案にもとづいて実施するようにする。

3年部会テーマ実現のための方策

視点1：社会を見る目を育むための教材をつくる

- 「火事をふせぐ」と「事故や事件をふせぐ」の単元を俯瞰し、地域の人々の営みから、社会を見つめるための知識を獲得する。

視点2：社会を見る目を育むための問いをつくる

- 「問い」について考えを巡らせ、社会を見る目を育むことで、自分と地域とのつながりに気づき、深く考えるようにする。

視点3：社会を見る目の育ちを見取るためにふり返る

- 「ふり返りの視点10」をもとに、子どもたちの実態や学習内容に応じてふり返りを行い、今後の自分の学びにつなげるようにする。

【授業実践予定】

- ①実施時期及び単元 未定
葛野小学校 田中 百恵 教諭
- ②実施時期及び単元 未定
向島秀蓮小中学校 門屋 大介 教諭

〈3年部会 部長 上田 亮介〉

4年部会

◇4年部会テーマ◇

自分たちの暮らしを支える人々のおもいや
願いについて学びを深めることで、
地域社会に対する誇りと愛情をもち、
地域社会と自分とのつながりを考える子ども

4年部会では、今年度の実践で、大単元「府内の伝統や文化と先人の働き」の中の小単元「祇園祭」「琵琶湖疏水」の教材化分析表を作成し二つの単元を俯瞰した授業づくりをしたいと考えている。

4年部会テーマ実現のための方策

視点1：社会を見る目を育むための教材をつくる

- 学習指導要領をもとに、複数の単元を俯瞰しながら「教材の何について調べるのか」「教材を通して何を考えるのか」等、確かな教材分析を行い、教材をつくりたい。

視点2：社会を見る目を育むための問いをつくる

- 「祇園祭」では、鷹山を約200年ぶりの復元に向かって準備を進めている。「琵琶湖疏水」では67年ぶりに疏水通船を本格的に復活させた。異なる学習であったのにどちらも長い時間休止させていたものを「現代に復活」させることになった。それぞれの事実からその理由について問いを設けて調べることで学習してきた「祇園祭」「琵琶湖疏水」の良さをより理解できるであろう。そうすることで、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養うことにつながるのではと考えている。

視点3：社会を見る目の育ちを見取るためにふり返る

- 研究部から示された「ふり返りの視点10」を参考にして単元の中に組み入れていくことで、どの場面でもどのふり返りをするのが子どもたちのより良い学びにつながるのか研究していきたい。

【授業実践予定】

- ①12月「きょう土をひらく
用水のけんせつ～琵琶湖疏水～」
桂東小学校 清水 一希 教諭

〈4年部会 部長 仙波 俊輔〉

5年部会

◇5年部会テーマ◇

社会のあり様や、そこに生きる人々の姿から学びを深め、よりよい社会へ向けて、社会と自分とのつながりを考えようとする子ども

5年部会では、国土の特色、産業の現状、社会の情報化について、国民生活との関連を踏まえて理解すること、また、社会的事象の特色や社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力を養うとともに、それらを基に議論したりする力を養うことを中心に授業づくりを進めていきたいと考えている。

5年部会テーマ実現のための方策

視点1：社会を見る目を育むための教材をつくる

- 子どもたちが既習を活用しながら学習のつながりを感じることができるような授業づくりを目指していく。そのためには、複数の単元を俯瞰しながらつながりを見出し、より既習を活用できるような教材研究に取り組む。

視点2：社会を見る目を育むための問いをつくる

- 子どもの思考の流れを大切に単元構想の工夫を図る。とくに子どもが捉える問いを大切に学習問題を作り、そして、学習問題を追及・解決する問題解決学習を進める。
- 「自らの学びを調整する」という視点を単元構想の中に適切に位置づける。

視点3：社会を見る目の育ちを見取るために振り返る

- ふりかえりをする場面や視点を意図的に設定し、子どもが自分の学びを実感できるようにする。
- 自己の変容を捉えるために、ふりかえりをGIGA端末にポートフォリオとして残していく。

【授業実践予定】

- ①12月上旬～12月中旬
「わたしたちの生活と工業生産」
岩倉南小学校 成宮未希子 教諭
- ②2月下旬～3月上旬
「わたしたちの生活と環境」
鳳徳小学校 田村 祐崇 教諭

〈5年部会 部長 林 奈央人〉

6年部会

◇6年部会テーマ◇

社会の発展に寄与した先人や今を生きる人の営みから学びを深め、社会と自分とのつながりを多角的に考える子ども

6年部会では、研究部の方向性を受け、社会と自分との関わりを意識しながら、社会事象を自分ごととして捉えられるような目を育てる社会科授業の構築を目指していきたい。そのためには、他学年とも情報交換しながら、柔軟性のある発想で活発に意見を交わせる部会にしたい。

6年部会テーマ実現のための方策

視点1：社会を見る目を育むための教材をつくる

- 単元を構想する際には、複数の単元を俯瞰しながら考え、既習事項を元に予想したり、比較しながら考えたりする場面を計画する。単に知識を習得するだけでなく、活用させながら考えを広めたり、深めたり出来るようにしたい。また、単元の学習問題を子どもたち自身の学びに位置づけることで、自らの学びをふり返り、調整できるようにしたい。

視点2：社会を見る目を育むための問いをつくる

- 子どもと社会をつなげるためには、「問い」が「自分自身の問い」になっているかどうかが、大切なポイントであると考えている。また、単元を横断しながら、既習事項を活用できるような「問い」を検討していきたい。そして社会的事象を様々な視点から学ぶことで、多角的に考えられる子どもたちを育てていきたい。

視点3：社会を見る目の育ちを見取るために振り返る

- 授業の終末での「ふり返り」は、評価する内容や視点をきちんと子どもたちに示しておくことで、全員がゴールを意識し、お互いに評価し合えるような単元や授業の在り方を検討していきたい。

【授業実践予定】

- ①10月下旬「江戸幕府の政治と安定」
朱雀第一小学校 村地 勝成 教諭
- ②11月下旬「明治の国づくりを進めた人々」
九条塔南小学校 洲崎 陽大 教諭
- ③12月下旬「世界に歩みだした日本」
下京雅小学校 中川 清博 教諭

〈6年部会 部長 柱谷 元紀〉

今「探究する子どもを育てる」

極覧会 会長 岩 淵 信 明

7月に、ある幼稚園の学校運営協議会に出席しました。

配布された資料には、「本園が、2021年度 ソニー教育財団『科学する心を育てる』最優秀園に選定されました。」と書かれていました。2020年度は優秀園に選ばれ、21年度はついに最優秀園に選ばれたようです。まさしく、この園の教育・保育の質の高さが証明されたといえましょう。この園がどのように子どもを育てているのか興味がわきます。

研究をまとめたものを見ると、その内容はなかなか面白いです。毎日の保育から子どもが興味をもつテーマを取り上げ、子どもの問題意識を大切にしながら、子どもたちがいろいろな人の手を借り、手立てを講じて子どもたち自身が問題を解決していく様子がうかがえます。その内容は、子どもたち一人ひとりが苗を植え、大切に育てているイチゴが夜の間に何者かに食べられてしまった、というところから始まります。イチゴをねらう生き物が夜の幼稚園にやって来たようです。どんな生き物がやって来たのか、どうすれば確かめられるのか、どうしたら防ぐことができるのか、子どもたちは考えます。まさしく、「科学する心」を育てる幼稚園児の追究活動の始まりです。指導者は、どのように導いていけばよいのでしょうか。

6月に行われた高等学校の学校運営協議会では、自校の生徒の「伸びしろ」をどう伸ばしていけばよいのか、について話し合われたことが印象に残っています。

生徒に「正解のない時代を生きる力」を育てるために「地域の課題解決No. 1校」を目指す多様な取組を推進していきたい、と話されていました。

高校の「総合的な探究の時間」で、地域と連携したプロジェクト企画として、SDGsの一つ「住み続けられるまちづくり」に向けた取組が行われていました。生徒が1学期から、地域の魅力を洗い出し映像化して、2月の夕方6時から約1時間半、高校の校舎北側壁面（10m×10m）に岩倉の四季の映像を映し出すという展開です。学校の近くを走る電車の乗客に見てもらい、地域の良さを知っていただくという高校生の発想による企画です。電車も高校前を通過する間はスピードを落とし、アナウンスを行うという、冬の夜空に繰り広げられる高校生のプロジェクトに乗客が楽しんだとのことでした。

幼稚園と高等学校で学ぶ子どもの姿にふれて、改めて、小学校の問題解決的な追究活動について考えてみたいと思います。

子どもたちの活動が、好奇心や問題意識をもとに意欲にあふれ、キラキラと目を輝かせて調べ、そして、いろいろな人に問いかけて追究する喜びに満ちあふれた姿こそ目指すべき子どもの学びの姿であるように思います。

近年、子どもの学びは、対面式の学習（交流）とオンラインによる学習（交流）とが入り混じったハイブリッド型の新しい学習スタイルへと変化してきました。

こんな時期こそ、子どもの学びの姿がいかにあるべきか考えてみたいものです。